公立志津川病院の医療支援

派遣先：全国医学部長病院長会議 医療支援チーム（宮城県登米市 公立志津川病院）
派遣期間：平成24年11月5日（月）～ 11月9日（金）
派遣人員：内科　医員　森田　善方

2012年11月5日～9日までの5日間、公立志津川病院および南三陸診療所にて診療を行いました。・・・と書くと2施設で働いたようですが、実は元々はどちらの施設も南三陸町にある「公立志津川病院」という１つの病院でした。しかし津波の影響で、入院機能のみ35kmほど内陸にある隣町に移転し、よねやま診療所の一部を借りて運営。外来機能は元々の南三陸町に「診療所」という形で残ったという事でした。

志津川病院が受けた津波被害は本当に甚大で、入院患者１０７人のうち７２人が死亡・行方不明となり、院内では看護師と看護助手計３人も波にのまれました。元々の建物も使用不可能となり、取り壊されております。

期間中の何れの日も、日中は公立志津川病院（入院施設）で勤務しました。病院で入院患者さんを担当する内科医は、自治医大出身の6年目の渡辺先生と、10月から東北大学のメガバンク機構より派遣されている村上先生のお二人でした。「被災地支援」という事で、凄く緊張して挑みましたが、志津川病院では普段と変わらぬ一般内科の入院診療を担当しました。普通に入院患者さんを診察して、普通に指示を出して・・・本当に特別なことはできず「これでお役に立てているのかな？」と不安になったほどでした。ただ、渡辺先生は南三陸診療所の外来勤務もあり、志津川病院では月・金の2日間の勤務という事でした。特に、村上先生が赴任される1ヶ月前までは、南三陸診療所での外来を終えて35kmの移動の後、病棟勤務をするという激務をしておられました。今でも金曜日以外は内科常勤医が村上先生の1人のみの状況との事で、お二人とも「支援の医師が来て凄く助かっている」と言っておられました。村上先生は4ヶ月の予定・・・との事で、その後も東北大学から医師が順番に派遣される・・・との事でした。東北地方は元々が慢性的に医師不足だったと聞きますが、この震災の影響でよりそれが顕著になったようです。志津川病院の日々の勤務でも「被災地」を強く意識する事は多くは無かったのですが、患者さんやそのご家族が「今も仮設（住宅）に住んでいる」「1時間くらいかけて外来受診をする」と言っておられるのを聞いた時は改めて震災を実感しました。

11月6日（火曜日）の夜のみ南三陸診療所（外来施設）の当直でした。前述した通り、元々は同じ施設・・・なのですが、35kmも離れており、なんと車で1時間かかります。道中・・・職員の方の車に乗せてもらったのですが・・・「ただの空き地に見えるところが実は元々は集落があった」「防波堤が決壊したままなので満潮では道が水に浸かる」「（鉄骨の基礎工事のワイヤーの一部のみ残った建物を指して）これが元々は銀行の建物だったのです」「流石にマイナス13度になるとポットのお湯まで凍ってました。仮設住宅って本当に寒いな・・・と実感しました」などの説明を受けて町並みを見ていると、本当に震災の傷跡は全く癒えていない事を感じました。

南三陸診療所は「プレハブですよ」と事前に聞いていたのとは違って、2階建ての立派な建物でCTまであるとの事でした。ただ、ほんの数カ月前までは実際にプレハブで診療していたとの事でした。当直でご一緒したナースもその頃から活躍しておられた方で、「あの頃のプレハブは寒くて大変だった」「当直の時は車で寝ていた」「そんな寒さの中患者さんも朝から外で並んで診察を待っていた」など聞き、改めて当時の大変さを知りました。医局におられた内科部長の西沢先生にお話をしてもらいました。「道中（の震災の爪あと）、驚かれたでしょう。どうぞ帰って皆様に今の状況をお話ください」と言っておられたのが印象的でした。

以上、乱文乱筆ではありますが私の東北での診療内容です。
印象的だったのは、患者さんや医師・スタッフの皆様が本当に普通に過ごしておられ、普通に仕事をしておられる事でした。これほどの被害にあい、現在も町並みが回復しない中、「普通」に生活や仕事をする事の大変さ、凄み、逞しさを感じました。もし自分が被災したら、こうやって他所から来た人を暖かく迎える事ができるか自信がないくらいです。震災から1年と8ヶ月が過ぎて、申し訳ないながら遠い関西ではともすれば震災のことを思い出さない日もありましたが、まだまだ復興はほんの1歩進んだか進んでいないか・・・。特にほぼ震災の香りが無くなった（ように感じる）内陸部に比べて、津波の被害が甚大だった地域はまだまだ力が必要です。今回の派遣で僕は何も出来なかった無力感が残りましたが、今回、実際にこの地を訪れて「本当に復興に力を注ぐべきなのはどこなのか」と考え、色々と実感する事ができました。この貴重な機会を得た身としては、これからの日々の暮らしの中で震災の記憶をなくさない事、そして何か出来ないかと探しながら進んでいく義務があるなと強く思いました。

最後になりますが、今回の派遣でお世話になった先生方・スタッフの皆様、そして患者様、そのご家族の皆様のご多幸をお祈りします。また、1 日でも早く本当の復興を迎えられるよう、微力ながら僕も継続して取り組む事を誓います。